

留学生の自律的学習を目指した日本語教育実践 —プロジェクトワークを通して—

小原 律子

倉敷芸術科学大学非常勤講師

(2004年9月24日 受理)

1. はじめに

日本語教育の初級段階では、テキストを使用し、教師主導の文型や語彙の導入、練習を中心とした指導方法が行われている。しかしながら、中級段階に進んだ場合、疑似体験ではない真のコミュニケーションを通して実践力をつけていく必要がある。教師に依存することなく、自ら考え、実行し、内省するという自律的学習のための方法としてプロジェクトワークを実施した。具体的には、学習者が自らテーマを考え、それを実証するための質問表を作り、アンケートを実施し、その後、集計、分析、資料作成、発表という過程を通して、自律的な学習能力の養成を目指した。その実践の経過報告とともに、この活動による学習者の意識の変化および教師がどのように支援すべきかについて考察を行う。

2. 倉敷芸術科学大学留学生別科について

倉敷芸術科学大学留学生別科（以下別科という）は、2001年度に29名でスタートした。授業科目は文法、読解、漢字・語彙、作文、聴解、会話等の日本語に関するものと、情報科学、日本の社会、日本の経済、世界と日本、日本の政治、岡山の自然と文化といった日本文化への理解を深めるための専門科目からなり、その他に総合演習という科目がある。

初年度の総合演習では、事務手続きなどの連絡、課外活動などが行われていたが、2002年度より日本語科目として扱われることになった。そこで別科Aクラス（中級レベル）において、2002年度及び2003年度の総合演習ではプロジェクトワークとしてアンケートを実施し、発表するという活動を行った。

3. プロジェクトワークについて

プロジェクトワークとは、今まで学んできたことを方法論として、実際に調査を行うことである。また教室での日本語と現実社会での日本語のギャップをうめるための、コミュニケーションの滑らかさを養う活動でもある。学習者が主体となり、教師の役割は学習者個人やグループの活動を助け、必要な情報を与えるという、従来の教室活動とは異なる部分が多い。日本語の文法や語彙を教えると言った狭い意味での言語教師の仕事に加え、日本という社会や文化の中で、情報をやりとりしながら、個人の意見や考えをどのように伝え合っていくかを考え、全

体を見渡して支援していかなければならない。つまり教師はファシリテーター（支援者）に徹し、学生の自主的な学習をサポートしていくのである。そして最終的には、受け身の授業だけでは得られない表現力、コミュニケーション能力を、この活動を通して身につけていくことを目標とした。この活動は、それまで教室という限られた空間で、教師とクラスメートという仲間内だけで使っていた日本語を、外の世界で、実際に使用するというチャンスでもある。それだけでなく、教師の指示に従って正しい表現を学ぶというそれまでのやり方から離れ、自分で考え、試行錯誤をくりかえしながら、実際の体験を通して、積極的に何かを学び取る姿勢なしには達成できない活動である。また様々なテーマを探し、調査することにより、外国人である学習者が日本に来て何を考え、今後どのような方向に進むのかあらためて見直す機会ともなったのではないだろうか。

日本語教育の現場における実践研究の重要性について、石黒（2004：11）は述べている。

人が実際に活動を行うことによって、欲求が「対象」と出会い、対象化された欲求、即ち、動機に変換される。活動する中で人は自らの「動機」を創造し、展開していく。「何か学びたい」から「これを学びたい」になることによって、学習者の学びは継続していく。この学びの「対象」を学習者と教授者が日々交渉しているのが授業という実践である。

本学の留学生別科の日本語学習者（中級レベル）に対し、2002年度後期及び2003年度の後期総合演習でプロジェクトワークの指導を行った。前期に学んだ日本語および日本文化について学習した知識をもとに、それぞれの興味のある内容について、アンケートという手法を使って調査をし、その結果をまとめて発表するという活動である。2002年度の活動後の反省から、2003年度はビクター・セッションなどの新しい試みを取り入れ、教師の支援方法についても見直しを行った。

4. 実施方法 活動の流れ

(1) 授業の進め方について説明

<2002年度> 初めて実施するためモデルとなるものがなかった。参考資料として、『トピックによる日本語総合演習テーマ探しから発表へ 中級後期』（スリーエーネットワーク）を使用した。教育をテーマとした1課の読み物や、教育に関する資料、グラフをもとにイメージ作りからはじめ、今後の活動の流れを説明した。

<2003年度> 前年度に記録したビデオを見て資料を配布した。モデルがあったため、到達目標はイメージしやすかったが、そのためになにをすべきかは明確には理解していない状態であった。しかし、動機付けとしては効果があり、これから行おうとする活動に対する興味と意欲がみられた。

(2) グループ分けとテーマの決定

<2002年度> 10名でスタートしたが、最終的に3グループ、9名となった。全員中国人で内モンゴル出身（男性6名、女性3名）である。来日から半年が経過し、クラス内で能力差の開きが大きくなっていったため、個人の作業よりグループで協力しながら活動することにした。グループ分けは、能力、性格など、バランスを考慮し、学習者の意見も聞きながら教師の指示で行った。また、各人が責任をもって取り組むよう、学習者の話し合いにより役割（リーダー、サブリーダー、書記）を決定した。それぞれのグループのテーマは次のとおりである。

1. 学生の髪の色についての調査
2. 外見と性格について
3. 日本人学生と留学生の生活調査

テーマは、学生の興味だけでなく、学内でアンケート調査することを前提とし、取り組みやすいものをアドバイスして、決定した。

<2003年度> 3グループ、9名で全員中国人（内モンゴル出身8名、瀋陽1名）（男性5名、女性4名）である。総合的に2002年度の学習者より、日本語能力、学習意欲とも上回っていたため、前年度よりも学習者自身で積極的に活動を進めていった。テーマは次のとおりである。

1. ダイエットについて
2. 日本人と中国人のイメージ
3. ジェンダーについて

(3) アンケート用紙作成

<2002年度> アンケートシートの例、アンケート調査計画表を配布し、学習者はテーマについて、何を知りたいのか、調査対象、結果の予測などについて考え、質問項目を書き出した。それに対し、教師はアドバイスや文法表現について誤用訂正を行った。この時点で、あとの作業が煩雑にならないよう、質問項目は多くなりすぎないように、ポイントがずれないように配慮した。発表の内容や結果よりも、自律的学習を意図した活動であり、活動の過程そのものを重視したので、自分でやり遂げたという達成感が得られることを第一に考えた。

達成感の強さについて、上田（1994：112）は次のように述べている。

「達成体験は成果と要求水準との相対的關係から決定されるもので、これを公式化すれば、
$$\text{達成体験} = \text{成果} - \text{要求水準}$$
の關係が得られるのである。したがって、われわれは、成果を大きくしようとすれば、要求水準を上げなければならないが、逆に要求水準を下げてたとえ低い成果であっても達成感を得られるように、とりはからなければならないのである。」

<2003年度> 前年度の具体例を参考にし、それぞれ独自の工夫が見られた。

「ダイエットについて」のグループは、男性と女性に対し別の視点から2種類の質問表を作ったり、実際の女性を見て、あるいは、絵を使ったりという視覚的な物を利用して成功した。また「日本人と中国人のイメージ」のテーマを選んだグループは、実際に中国人が関わった事件や日本人に関する中国での報道を取り上げて意見を聞く質問があり、参加者の興味を引いた。「ジェンダーについて」のグループは、難しい問題を、具体的にユーモアを交えた質問でうまく処理できた。「ジェンダー」については、それまでの授業の中（主教材『テーマ別 中級から学ぶ日本語（改訂版）』第9課）でとりあげられ学習していたが、別の視点からさらに踏み込んだ調査を行った。

(4) アンケート実施

<2002年度> 教室内で学習者同士でアンケートの練習をしたあと、学内で実際にアンケート調査を行った。教師は巡回し、学生の様子をみるとともに、なかなか声をかけられない者に対して手助けを行った。

<2003年度> 本学の日本語教員養成課程で学ぶ学部生4名と大学院生1名（男性2名、女性3名）（内留学生1名含む）の協力により、前年度よりも充実した活動となった。2003年度は学部生等との交流や助言を得て、実際にアンケートを行う前の段階で不安を取り除くことができた。その後、学内でアンケートを実施する際にも、同行した学部生等の支援により、スムーズに活動が終了した。学部生等との交流は意味のあるものであった。この交流に備えて、アンケート用紙作成に熱心に取り組む姿勢が見られ、実施後の活動に対する意欲も高めることができた。

(5) 集計、分析、資料作成

<2002年度> 一人15名以上、グループで45～50名以上のデータを収集するように支持したが、期日までに達成できないグループもあった。グラフの種類、グラフに関する言葉、発表の構成、表現などについての資料をもとに作業を行ったが、グループ内で協力的でない者も見られた。資料は手書きであった。

<2003年度> データは教師が支持した目標よりも多く集まった。グラフや資料はExcelやWordを使って作成した。作業もパソコンでの作業担当、発表原稿作成、司会や案内状作成の担当と役割分担がうまく行われた。

(6) 発表準備

<2002年度> グループごとに予行演習を行い、構成、時間配分、発表時の姿勢、発声、視線、司会進行などの発表技術について指導を行った。この時点ではそれまでとは変わって、全員が真剣に取り組んでいた。別科以外の教員や学生に案内状を出したことで、緊張感が高まってきていた。

<2003年度> 前年度は教師が案内状を作成、配布したが、2003年度は学生が作成し、学生が直接手渡しするようにした。その際の会話の表現、敬語の使い方などの指導も行った。

た。発表の予行演習と指導を行った後も、授業が終わってから自主的に練習を重ね、資料を手直しし、教師にもさらに助言を求めるなど積極的であった。

(7) 発表

<2002年度> 全員が積極的に各自のできる範囲での努力をしていたが、準備段階であまり参加していなかった者は発言できる内容も限られており、一人だけが話しているようなグループもあった。

<2003年度> 全員が協力的で、グループとして助け合いながらうまく機能していた。発表の際も、聴衆に問いかけをする形で行う工夫があり、参加者からも多くの質問が出るなど相互間の交流があり発表者と聴衆の一体感のある発表となった。

(8) フィードバック

<2002年度> 発表の際、参加者にアンケートの評価用紙を記入してもらい、そのコメントをまとめた。また撮影したビデオをもとに、教師が文法、表現、語彙、発音、アクセントの誤用分析を行った。それらの資料をもとに、もう一度、学習者とともにビデオを見ながらフィードバックを行った。学習者はそれまであまり気付かなかった発音やアクセントの誤りを直したいと強く感じたようだった。

<2003年度> 発音やアクセントについては同様に感じていた。また発表後の達成感とともに、緊張してうまくいかなかったと感じた者もいたが、発表のときの視線や態度についても自身の姿をビデオを通して客観的にみることができ、今後これらの問題点を改善していきたいという意欲が見られた。

5. 2002年度における問題点

この活動は、これまでの教師主導による学習スタイルから、学習者が自ら問題を発見し、それに対して自律的に取り組んでいく学習へ移行する契機を与えることを目的に行われた。しかし全ての学習者が自律的に活動を進められるとは限らない。学習者の中にはこの学習スタイルに強い抵抗を感じる者もみられた。

Aクラスのメンバーは来日以前にすでに日本語を学んだ経験があり、その学習方法との違いが受け入れられないことも考えられるが、日本語学習あるいは語学習得の方法に特定されず、中国での教育方法の影響もあるのではないかと考えられる。

1996年に北京大学に留学していた近藤は(1997:75-81)次のように述べている。

北京大学の次世代を担う大学生たちが一心不乱に勉強している様子を見ると、「勉強」という四年間の軍事訓練を受けに来た兵士のようである。また中国の大学生の間で英語を学習することがブームとなっている。「託福」とは「TOEFL」(アメリカ留学のための英語能力試験)のことであるが、北京大学構内にそのための予備校まであり、そこでの学習方法は「とにかく教科書を暗記しろ」と言われて、600ページもある教科書を丸暗記させられるのである。

2002年度の学習者の中で、とりわけ強く反撥したのは、すでに中国の大学を卒業し、大学院進学を目指す男子学生である。彼はクラスの中で、教師の指示通りに学習した事項を整理し、予習復習をこなし、文法のテストでは好成績を収めるような優秀な学生であった。つまり自分の学習の仕方が確立されており、この方法で今までは成功してきたという自信を持っていた。彼は、プロジェクトワークの最初の段階では、まじめに取り組んでいるように見られた。しかし作業が進んでいくうち、まわりの協力が得られないこともあって、なぜ自分がこのようなことをしなければならないのかと疑問が生じてきたようだ。そして発表が近づいた段階で、この活動は意味がないと訴えてきた。それに対し、活動の目的、意義について説明したが、納得は得られなかった。その後、発表のための資料や原稿作りはほとんど彼一人で準備し、発表当日も自信を持って堂々とプレゼンテーションを行った。発表後のフィードバックでは、いままで自分では気付かなかった発音の間違いを今後改善していきたいという前向きなコメントは見られ、発表を無事終えたという達成感が得られたものの、活動そのものについては否定的な印象を抱いたままであった。

このことに対しては次のような理由が考えられる。

強固な“確信”を持っている、自分の学習の仕方に自信を持っている学習者は、新しい考え方や方法を受け入れにくく、「確信」が短期で大きく自律的方向へ変容することは期待できない。それに対し、自分の学習方法や日本語の進歩に自信がもてない学習者は、よりよい学習方法を探すことに積極的であり、新しい考え方を受け入れやすく自律的方向への変容も生じやすい。(斎藤、1998：1-11)

また、学習者自身の問題のみならず、教師の支援方法にも問題があった。主に3つの問題点があげられる。第一番目は、活動を始める前に、十分な理解が得られるような説明が不足していたことである。第二番目は、自律的学習のためにと考えすぎて、適切な助言や細かい配慮ができていなかった。第三番目として、3人のグループでの活動であったが、それがうまく機能していないことに対するフォローができていなかったことがあげられる。これらの反省をふまえて、2003年度に再度プロジェクトワークを行った。

6. 2003年度の改善点

前年度の活動から、教師の役割についての見直しを行い、次のような改善を行った。

(1) 活動を始める前に

前年度の発表を記録したビデオや発表の資料を見せたことで、活動の最終目標がイメージしやすかった。この時点で、おもしろそうとかやってみたいという積極的な意見も多く聞かれた。

(2) ビジター・セッション

アンケート用紙が完成した時点で、本学の日本語教育を学んでいる学部生や大学院生に協力してもらった。外部の人が参加するということが、適度な緊張感があり、意欲が高まり、その後の活動へのはずみがついた。まず教室内でビジターにアンケートに答えてもらい、その際、質問の仕方や内容についてのアドバイスも得られた。その後、教室を出て、学内でアンケートを行う際にも同行してもらい、支援や助言をうけた。初めて行う活動に不安がある者も、学部生たちがそばにいてくれるだけで安心感があり、とても楽しそうであった。

ビジターが日本語教育を学んでいる学生たちなので、活動に関心もあり、留学生に対する理解もあったことでうまくいった面もあるが、留学生たちにとって、クラスメートや教師以外の人たちとの接点を持つという意味は大きかった。いきなり第三者の前で発表を行う前に、また長期にわたる活動の中間地点で、教師以外の日本人たち（内1名は留学生であるが、日本語能力は上級レベル）とのコミュニケーション活動は学習者にとっていい刺激となった。

(3) グループ内の作業の負荷の調整

グループで活動する場合、どうしても協力的でないメンバーがいたり、資料作成はパソコンが得意な特定の人に偏ったりすることが起こってくる。それぞれの得意分野を生かしてうまくグループワークが行われる場合もあるが、積極的に活動しない者がいると、他のメンバーから不満が出て、活動自体が停滞してしまうことも起こってくる。その場合は教師が調整していかなければならない。協力的でないメンバーがいる場合は、その原因をつきとめ、早期に対処する必要がある。2002年度の場合、日本語能力が不足しているため参加できない者と、活動の意味を理解していない者、学習スタイルが受け入れられない者がいた。能力の低いものには適切な役割を与えることで解決できたが、それ以外の場合の対処の仕方については、今後の課題となった。

7. 学習者の変化について

この活動を終えて、学習者に感想を聞いた。全員がこのような活動は初めて体験したが、発表やレポート、論文作成に役に立つと思うと答えた。

(1) 活動前

やったことがないのでやってみたい、おもしろそうという積極的な意見とともに、何をやるのかよくわからない、大変そう、難しそう、普通の授業の方が良いという意見もあった。

(2) 活動で大変だったことは何か。

- ・アンケートで知らない人に声をかけるのが恥ずかしかった。
- ・日本語で聞くのが難しくてうまくできなかった。
- ・アンケートの内容をわかりやすくまとめること。
- ・みんなで協力しながらやること。
- ・発表の日まで時間がなくて準備が十分できなかったこと。

- ・多くの人の前で話すので緊張した。

(3) 活動に対する自己評価

- ・前半はあまり協力的ではなかったという者もいたが、後半の資料作り、発表に関しては全員が自分から積極的に取り組んだと評価した。
- ・グループの他のメンバーも最後は全員が大変協力的だったと述べている。
- ・発表は緊張のため準備したことをうまく発表できなくて残念だったが、この経験を今後を生かしたいという前向きな意見が多かった。

(4) 活動後の感想

- ・アンケートの手法について学べた。
- ・資料やグラフの作り方がわかった。
- ・日本語を実際に使ってみるいい機会だった。
- ・人の前で話し方が練習できた。
- ・発音やアクセント、文法の間違いに気付いた。
- ・みんなで協力してやった。
- ・柔らかくきれいな日本語が話せるように頑張りたい。

活動の前と後を比較すると、学習者の変化が見られる。前半では活動に消極的だったり、グループのなかで協力的でない者もいたが、最後の発表に向けてはだれもが真剣に取り組む姿が見られた。普段の教室内での授業と異なり、外部の学生や教員の前で発表するという大きな目標がプレッシャーとともにやる気を起こさせたことは確かである。

上田（1994：102－119）はやる気と達成体験について、

達成感の強さを決定するのは、周囲の人々との相対的な関係である。教師や親、先輩など年長者や指導者など、周囲の権威ある人々から高い評価を受けたり、受け入れられたりすれば、当然達成感が高まるのである。自己の課題が成功し、達成体験をもつと、成長志向を持つ人は、これに満足せず、さらに困難な課題を求め、これに挑戦しようとする。また、自信が生じ、たとえ、次の段階で失敗したところで、さらにその課題を続けようとするものである。と述べている。

学習者の自己評価でも、発表そのものは緊張や準備不足のため自分では満足のいかない結果に終わってしまったが、もっと良くしたい、日本語が上手になりたい、この反省を今後を生かしていきたいという強い意欲がみられた。

8. おわりに

留学生に対する日本語教育の実践活動において、学部生等との交流や、第三者を招いての発

表などが効果を上げたことは明らかである。特に発表の前には、それまでの通常の授業では見ることのできないほど積極的に自主的に活動する学習者の姿があった。自律的学習を目指した活動はこの時点で効果があったと言える。しかし、その効果がこの後も持続していくのか、また大学進学後に生かされるのかは、課題として残された。また、自律的学習を目指した活動だったが、学習者は日本語の問題やアンケートの手法などのスキルについても多くを学んだと感じていた。教師の立場からは、今後別科だけでなく学部留学生に対しても実践的な教育を行っていく重要性を感じた。

それと同時に、この活動は、留学生のみならず、教師やこの活動に係わった日本人学生にも少なからず影響を与えた。実際に留学生たちが日本でどのような興味を持ち、どのように感じ、どのような学生生活を送っているのかの一端を知る機会ともなった。

これまでのようなイベントや旅行などの交流だけでなく、授業を通してセッションが行われる機会が増えれば、留学生、日本人双方に変化が起きるのではないだろうか。

その他に、学習者の母国での教育事情などについてもさらに調査し、留学生教育に生かしていく必要がある。

本学においても多くの留学生を受け入れているが、互いの教育の良い面、悪い面を学びあい、留学生、日本人学生の双方が刺激し合うことで、互いに独創的な発想を育み、国際社会で活躍することが期待されている。

引用文献

- 1) 石黒広昭 (2004) 「フィールド学としての日本語教育実践研究」『日本語教育』120号 11 日本語教育学会
- 2) 上田吉一 (1994) 『シリーズ人間性の心理学 自己実現の達成』102-119 大日本図書
- 3) 近藤大介 (1997) 『北京大学三ヵ国カルチャーショック』75-81 講談社
- 4) 斎藤ひろみ (1998) 「自律的学習能力を養うために教師は何ができるか」『言語文化と日本語教育』第16号 1-11 お茶の水女子大学日本語文化学会

Japanese Language Educational Practice
which Aimed at Autonomous Study of International Students
—Through Project Work—

Ritsuko KOHARA

*Kurashiki University of Science and the Arts,
2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan*

(Received September 24, 2004)

This paper reports on Japanese language educational practice for international students at Courses in Japanese Studies, Kurashiki University of Science and the Arts from 2002 to 2003.

It is necessary for students in the intermediate Japanese language class to practice the real communication. And the students have to learn by themselves, not depending on their teachers too much. Teachers also should study how to support them effectively.

Through this project work of conducting questionnaire survey, I aimed for international students to learn independently and stand on their own two legs. As a result of this practice, students came to think and work by themselves from study under teacher's instructions.